

深江文化村居住の

ワルターについて

研究員 有 吉 康 徳

はじめに

深江文化村に、ワルターという人物が居住していたことは知られており、『本庄村史』の中でも家屋番号Bの借主はワルターであったと記載されている(図)。また一九四〇年十一月三日の「大阪毎日新聞」の引用文では「ベルギー生れのオルサーら七軒が居残っているだけになった」という記載があり、深江文化村から多くの外国人が去った後にもワルター一家が残っていたことがわかっていいる。一方でワルターの生没年や来日時期、どういった仕事をしていた人物であるかについてはこれまで把握できていなかった。この度伊丹市在住の渡邊正之氏の調査や史料館の補足調査により、ワルターやその家族に関する情報が明らかになったことからその一部を紹介する。

ワルターの半生

ワルターについては、略歴を記したノートが見つかり、本名は Jean Voldemmar Walther といい、一八八八年にロシアのサンクトペテルブルグで生まれたと分かった。ベルギー国籍の人物である。一九一五年九月十五日にロシアでポーラ (Paula Sophie Walter) と結婚した(以上、略歴ノート、写真1)。別

資料の UN

TRG (申

請) に娘の

レオノール

は一九一六

年九月九日

に横浜で生

まれたと記

載されてお

り、一九一

五年から一

九一六年頃

に来日した

ことが分

かった。ワ

ルター宛の

はがきから

横浜山手居

留地五七番

地に住んで

いたことも確認できた。『The Japan directory』(国会図書館蔵)から一九一七年〜一九一八年は The SWISS Japanese Trading Co. (東洋輸出入商会) で働いていたことも判明した。

妻ポーラの旅行記録「Dampfer D. Emil Kirdorf's te reise」に

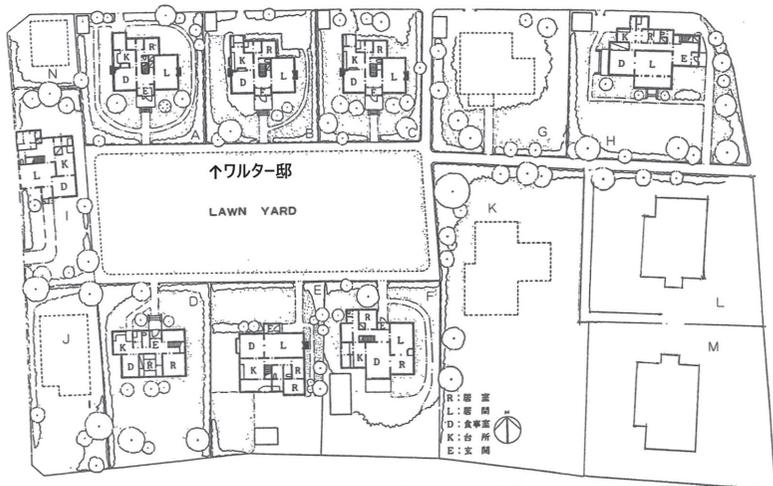


図 深江文化村の配置図

山形政昭「芦屋『文化村』の記」

大阪芸術大学紀要『芸術』6 (1983) 所収の図に加筆

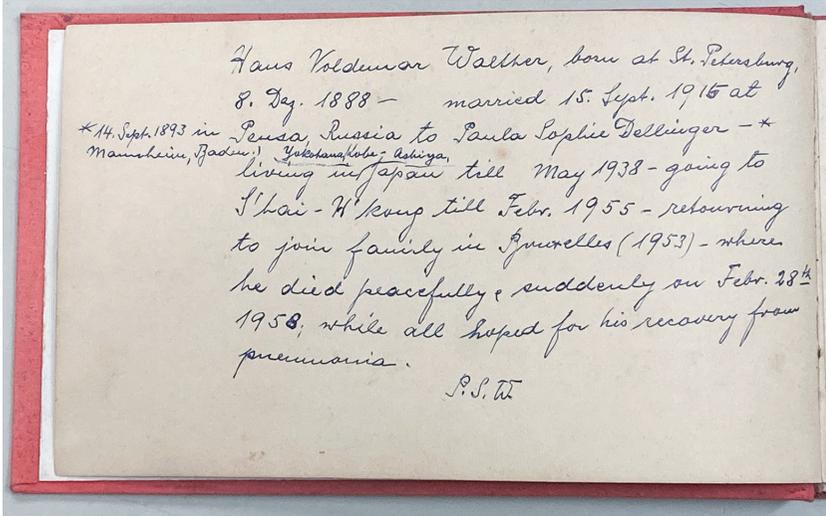


写真1 ワルターの略歴を記したノート（渡邊正之氏提供）



写真2 ワルター夫人（同）

ワルターの妻ポーラは一八九三年にドイツのマンハイムで生まれた（写真2）。日本に来てからは横浜から神戸に移り、山本通や深江文化村に居住した。一九三二年ころからKOBE WOMEN'S CLUBに所属、交流事業に加わった。長期間の旅行もしていた。ビザの取得記録から判明する居住地は以下の通りである。

一九一六年から二一年まで横浜居住→二三年ま

社マンで、一九二六年のベルギー領事館あての書類では、ワルターは三宮町一丁目の村田梅谷商店に勤務していた。しかし一九三五年刊の日本と満州国に

は一九二三年には山本通二丁目に居住。一九三五年にコロイド科学者のワイルマンからワルターに送られた手紙の宛先は北野町四丁目一二五となっている。北野町四丁目一二五は北野町のトーアホテルの住所地で、ホテルに滞在していたか、郵便物の受取代行をしていたのだろうか。神戸に移った時は引き続き商

居住する外国人を調査した『Japn-Manchoukuo year book』（国会図書館蔵）によれば、一九三〇年にInsurance Agency of Life, accident, fire, motorcars & Fidelity という保険代理店を起業、住所は深江文化村とある。同書には一九三九年発行分まで毎年、同じ内容で掲載されている。

写真1のノートによれば一九三八年五月まで日本にいたが、上海と香港に移り、一九五三年に家族と合流したことが記載されている。妻ポーラがアメリカのワシントンに出国したビザでは、本人の住所が深江文化村、夫の住所は香港と記載されている。ワルター自身は、戦前に拠点を上海や香港に移していたが、家族は引き続き深江文化村に居住していたのである。

一九五三年の九月から十一月にかけて神戸港から家財道具を発送したことを示す記録が複数あり、ワルターの家族はこの時期にベルギーに帰国したようである。

そしてワルター本人も一九五五年に香港からベルギーに帰国し、一九五八年にブリュッセルで亡くなった（写真1）。

ワルターの家族

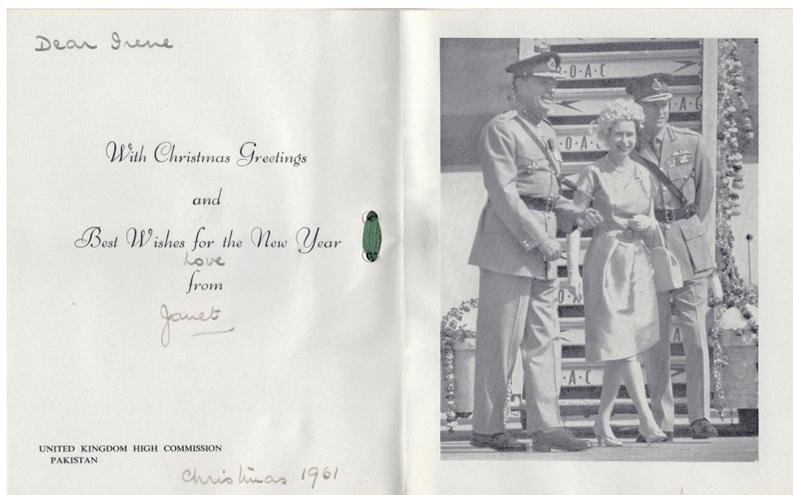


写真3 イレーヌに贈られたクリスマスカード (同) 1961年

一九三六年に三井系のドイツ物産会社に勤務した。一九三八年頃にバイエル薬品合名会社に移り、一九四七年頃まで在籍した。一九五〇年にアメリカ赤十字社で看護助手の資格を取得したことを、香港の父ワルターに報告した書類も見つかった。

次女マリアンヌ (Marianne Paula Walther)

で娘二人とドイツに滞在→一九三七年まで神戸や深江文化村に居住→一九三八年までドイツ、ベルギーを旅行→一九五二年まで深江文化村居住→一九五二年ニューヨーク→一九五三年ベルギー帰国。

長女のレオノール (Leonore Edith Walther) は、前述したように、UNTRG (申請) によれば一九一六年に横浜で生まれ、

はベルギー移住後の選挙関係資料から一九一八年に横浜で生まれたと判明した。一九四八年に妹イレーヌからマリアンヌ宛の手紙から Dodwell & Co. 神戸に勤務しており、ワルター一家が日本を離れるまで深江文化村に残っていたことが、三女との手紙のやりとりからうかがえる。

三女のイレーヌ (Irene Hildegard Walther) は、生年についてはよくわかっていない。神戸聖マリア女学校 (神戸海星女子学院の前身) とカネディアンアカデミーを卒業し、一九四六年にGHQの速記秘書・通訳として働いていた。イレーヌからの手紙から一九五〇年に日本を離れ、香港のベルギー領事館やパキスタンのベルギー大使館に勤務していた。一九六一年にはエリザベス女王がパキスタンを訪問、イレーヌも関わったと思われる、この年イギリス大使館からイレーヌにクリスマスカードが届いている (写真3)。

おわりに

深江文化村に居住していた音楽家に比べて、その他の外国籍の住人の経歴についてはあまり知られていなかったが、この度の渡邊正之氏の調査により、その一端を知ることができた。また、戦前から戦後にかけて引き続き深江文化村に居住していた外国籍の住人がいたことも明らかになった。なお、本稿では触れなかったが、古澤邸を設計し、自身も深江文化村に居住したラディンスキーからワルター一家に送られたと思われる手紙も見見されている。この手紙については今後情報を整理して報告することとしたい。